
旅立ちの朝

幸守舞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旅立ちの朝

【Nコード】

N0645T

【作者名】

幸守舞

【あらすじ】

英雄伝説 空の軌跡 の二次創作です。

PSP版、英雄伝説 空の軌跡 the 3rd の月の扉?で語られる『Episode:旅立ちの朝』を文章化したものです。エステルとヨシユアの子供時代から始まり、零の軌跡へと繋がる外国への旅立ちで終わる予定です。

基本、ヨシユア視点で時々エステル視点になります。

ゲーム内の台詞と、ドラマCD「英雄伝説 空の軌跡」ヨシユア物語 封じられた記憶」の台詞を入り混じらせています。

ストーリー的にはゲームに沿って進行します。

地の文は作者の想像？ 妄想？ により書かれています。予めご了承ください。

なるべく世界観を壊さぬように頑張ったつもり……。あくまでつもり……。

The First Week・「1」(前書き)

英雄伝説 空の軌跡 の二次創作です。

英雄伝説 空の軌跡 the 3rd の月の扉?で語られる『E

pisode:旅立ちの朝』を文章化したものです。

苦手な方はご遠慮ください。

The First Week .「1」

どこからか聞こえる懐かしいハーモニカの音と、それに混じる不吉な足音。

それから

やあ、こんにちわ。

……そんなに警戒しなくてもいい。私は魔法使いだ。
君の心を治してあげよう。

ただし………

代償は支払ってもらおうよ？

「うつつ……く……」

……う、うわあああ……！！！」

「……ヨ、ヨシユア！？ わ、また熱上がってる！」

突然、叫び出したヨシユアにあたしは慌ててその顔を覗き込んだ。
苦しげな様子を視界に収めながらそつと額に触れれば、その熱さに
思わず声を上げてしまった。

「……、暴れないの！」

触れらる事を嫌うかのように顔を振ったヨシユアにあたしは眉を

上げる。だけど、ぐったりとした姿を見ているうちに不安で上がった眉も下がっていた。

「タオル、タオル……」

眩しかきながら水の入った桶でタオルを濡らそうとしてあたしは顔を擽しかめる。

「ちょっと待ってて。今氷取ってくるから！」

すっかり温くなってしまった水を取り換えるべく、あたしは部屋を飛び出した。

「姉さん、ぼくは……ぼくは、もう……」

その頃、僕の頭は壊れた蓄音機のように同じ言葉を繰り返し続けた。

「だけど、僕はその声を”知らない”。

僕が知っているのは、ただ……」

The First Week・「2 1」

「……………」

木の幹を背に、僕はぼんやりと虚空を見つめていた。
無意識に唇が何かを紡ぎ、頭は何かを思い出しかけるが、すぐに雲を掴むようにその端々から消えていく。

「……………あの時、僕は……………」

「あれ、いない……………もー、ケガ人のクセに勝手にウロウロして〜！」

どつしよつもないもどかしい思いに駆られた時、ポンポンという擬音がよく似合う声が聞こえてきた。

「ヨシユア〜！ どこにいったのよ〜！ ヨシユアってば〜！」

あの声はこの家の主、カシウス・ブライトの一人娘、エステル・ブライトだ。

「あ、ヨシユア！ こんなトコにいたんだ」

わざわざ家から出てきた気配に余計な事を……………と、苦々しげに思う僕に気付く様子もなくエステルは近寄ってくる。

「まだ無理しちゃダメだってばー！」

「……………」

何も答えなければ、それはそれで面倒な事になるのこの数日で嫌になるほど知っていたから、僕は溜め息と共に投げやりに零す。

「……………もう平気だよ」

「え……………ホント？」

「……………もう熱下がったの？」と、驚きの声を上げ、窺うように聞いてくるエステルの顔も見ずに、早くこの会話を終わらせたい一心で事実だけを簡潔に述べる。

「……………負傷に伴う一時的な発熱だ。今朝には下がった」

どれだけ冷たくあしらっても、お節介を焼きたがるエステルを僕は持て余していた。特にこんな僕にも向けられる彼女の優しさが一番辛かった。

「そっか……………ふう、よかった……………」

ヨシユア、すっごくくうなされてたもん。一時はどうなることかと思っちゃったし」

そう、今みたいに、演技でもない本当の言葉が僕に鋭く突き刺さる。

「…………………………」

閉じていた目を開けば、閉じる前と変わらない景色が広がっていた。

「……僕は……何か言ってた？」

思ってもみなかった問いなのだろう。エステルは「……………へ……？」と、実に間の抜けた声を上げる。

だが、それ以上にそんな事を口にした自分自身に戸惑い、すぐに「……いや、何でもない」と、取り繕っていた。

「……………」

押し黙った僕に何を思ったのか、エステルが歩み寄ってくる。

「えっと……………」

何かを言いよどむ間があったけれど、それはすぐに何事もなかったかのように明るい表情で打ち消された。

「熱が下がったんなら、一緒に遊ぼうか。ずっと寝てばかりで、タイクツだったでしょ？」

まるで、そこに太陽があるみたいで、その明るさに思わず背けていた顔をエステルに向けていた。

「え……………？」

どうして、そんな顔ができるのだろうか？

どうして、得体のしれない存在である僕に、君は手を差し伸べる？
言葉にならない疑問を全て打ち砕く笑顔に、僕は。

「うんうん、わかるわかる。あたしも熱のときは死ぬほど退屈だったもん」

呆然とする僕を置いて、エステルは一人でブツブツと考え込む。

「あ、でもヨシユアは足ケガしてるから、まだ走るのはムリかあ…」

えつと……じゃあ、缶ケリも鬼ごっこもダメだし……」

あっちこっちに視線を彷徨わせながら「うーん」と唸る彼女を見るうちに我に返った僕は、自分自身を落ち着かせるために再び目を閉じた。

「……………」

エステルを視界から追い出せば、驚くほど冷静な自分が顔を覗かせている。その事に僕は酷く安堵していた。だから僕は視界を閉ざしたまま口を開く。それは無防備に近付いてくる彼女への警告。そして 呟くように付け加えた言葉は自分に言い聞かせるためのもの。今ある状況を忘れないための。

「遊びたいなら、一人で遊べばいい。僕には近づかないことだ。

……ここも、もうすぐ危険になるだろうから」

「へっ……………!？」

何をどこまで理解しているのかわからないが、素っ頓狂な声を上げたエステルに畳み掛けるように僕は続ける。

「手当には感謝しているよ。随分と世話になったね。

……カシウス・ブライトにもそう伝えておいて」

「……………」

これだけ言えばさすがに僕に付き纏う気は起きないだろう。何より、あれだけ騒がしかった彼女が押し黙ったのがその証拠だ。そう楽観的に考えていた。だけど……その考えは甘かった。僕はあまりにもエステルを知らなかったのだ。

「ダメだぞ、そんな顔してちゃ！」

「え……………！？」

だから、目を吊り上げたエステルを見た時には正直、戸惑った。いつもヘラヘラと笑っている印象があったから、こんな　こんな、怒った顔もするのだと……。

でも、それは一瞬で消え去り、彼女はいつも通りニッコリと笑っていた。

「元気がないときは、好きなことするのが一番。よし、ちょっと待ってなさい。今いいもの持ってくるから！」

そう自己完結したエステルは、こちらの意思など関係ないとばかりに駆け出した。その独特な気配が家の中に消えたところで、無意識に彼女を追っていた事に気が付き、僕は頭を振る。

(……………何なんだ、一体。まあ、いい。まだ、追っ手の気配はない)

木漏れ日が照らす手のひらを眺め、ままならない事の多さに僕はそつと溜め息を吐いた。

The First Week・「2」

(ここが見つかるまで、二、三日というところか……)

導き出された日にちは長いのか、それとも短いのか。

静かに燻り始めた何かに気付けないまま、僕は胸の内では咳き漏らしていた。

(あと三日……)

だが、僕が思考の中に沈むより早く、エステルが手に何かを握りながら駆け寄ってくる。

「ヨシユア〜！ ほら、これあげるから、元気出さない！」

そして、明るい声と共に差し出されたものは”ダンゴムシ”だった。

(……意味がわからない……)

冷めた目でその手に乗るものが見られているのにも関わらず、まったくそれに気づかないエステルは終始明るい声で喋り続ける。

「ね、かわいいでしょ？ つつくと丸くなるんだぞっ!？」

「……いらないよ」

まるで自分の事のように自慢するエステルに溜め息交じりに返事をすれば、なんで？ といったふう首を傾げられた。

「えっ、なんで？　こなんにかわいいのに〜！」

「そんなもの、いらないうて。それと、もうここへは来るな」

「むう、この虫は好きじゃなかったか……」

「……ここまで伝わないと、態とじゃないかと疑いたくなる。ここ
で重要なのは虫の好き嫌いではないのだが……。」

「……いや、そうじゃなくて……」

「ちょっと待って。あのケース取って来る！」

「……………」

あつと言つ間に駆け出した後ろ姿に、少しでいいから人の話を聞
けと言いたい。本日何度目かの溜め息を零して僕は切実に思った。

……それからほどなくして戻ってきたエステル両腕に抱えられ
ているものから僕は必死で視線を逸らす。見たくない、関わりたく
ないと逃避する僕の前にエステルは容赦なく突きつけた。

「ヨシユア、これでどうだ！！　『オニヤンマ』！」

「だから、いらないうて……」

「じゃ、こつち！　これならバツチリなはず！　ゼツタイ気に入る
からー！！　『マルガオオトカゲ』！！！」

「……………」

もう、答えを返す気力もなくなって僕は無言で視界を閉ざした。
……誰でもいいから彼女の行動原理を教えてくれないだろうか。
教えられたところで、僕に理解できるかどうかはわからないが。

「コイツもダメか!!」

そんな僕の内心を知りもせず、唸るように叫ぶエステルの自由が羨ましい。

「……あのさ、僕は個々の虫がどうこうって意味じゃなくて……」

「くづづづ………!! これ、あたしのお気に入りだったのに……」

（……何なんだ、この子は……? さっきから意味が分からない……）

地団太を踏みだしたエステルに僕はもうお手上げだった。もしも今、願い事が叶うとしたら、僕は彼女が人の話に耳を貸し、内容を理解してくれるようにして下さい、と言ってしまいかねない。……というより、そう願うだろう。

「……ヨシユア、ちょっとここに座んなさい」

「……もう座ってる……」

僕の状況も言葉も一切無視して突き進む彼女に、もう、どうにでもなれ、と全てを投げ出したい衝動に駆られる。

「ヨシユアって……どんな虫が好き？ おっきいのが好き！？」
キレイなのが好き！？」

そしてエステルはとても真剣な顔で残念すぎる問いを発し続ける。しかも自分で自分の言葉に興奮しているのか、頬が赤く上気している。こんな状況でもなければ、かわいいと思えたかもしれないが……。

「足は多い方が好き！？ 触覚長いのが好き！？」

キラキラとした瞳の輝きが増すことに、エステルの口調がどんどん早くなる。そんな彼女の動きに合わせて揺れる栗色の髪が陽の光を透^{すか}して金色に輝いていた。

「甲羅？ 羽？ それとも水かき！？」

幻想的ともいえる光景なのに、どんどん前のめりなるエステルの言動と行動に台無しである。僕はあるはずのない頭痛を感じてこめかみを揉んだ。

……仕方なく身を乗り出して答えを待っている彼女に一言。

「……虫はいらない」

「がーんー!!」

途端、この世の終わりを見たかのような表情でエステルは叫んだ……かと思えばすぐに悔しげな表情で上塗りされる。

「うっ、となると……何かビックリするようなヤツでないとダメか……」

……今までの会話のどこをどう解釈したらこの結論に辿り着くのか不思議でならない。

半眼で見つめた先にある彼女の瞳は決意の光で満ちていた。

「……よし、待ってる。あたしがとつてきてやる！」

元気な声を辺りに響かせ駆け出したエステルの足は軽い。その後ろ姿を呆然と見送りながら僕は思った。

「……あの子、虫が好きなのか？」

The First Week・「2 2」（後書き）

ヨシュアの「……………あの子、虫が好きなのか？」発言の後にエステルが『ビツクリ人面蛾』を捕まえるシーン。

視点切り替えるのも微妙な位置と量だったので省略しました。
以下省略した会話文です。

「ああ、逃げられた……………アイツ面白い顔してたのに……………なんのこれしき！」

「ヨシュア、動けないんだもんね。それに何だか、辛そうだし……………」

「うん、やっぱりあたしが虫をつかまえて、元気付けてあげないと……………」

「あ、さっきのやつ！　まて……………」

The First Week・[3]

(……………いざ、こうしてみると静かだな。何度も死線を潜ってきたけど、こんな状況は初めてだ……………)

微かに耳に届く鳥の囀りに、葉の揺れる音。一体何が違うのか、吹く風までもが穏やかに肌を撫でた。

「ヨシユア〜！」

だけど……………この静けさも長くは続かない。

「……………」

「とうっ！」と、大した段差もないのに跳躍したエステルは危ない気ない動作で僕の隣に両足を着け、そのまま勢いを殺す事なく両腕を突き出してきた。

「ほら、見て見て！ コイツ、面白い顔！」

「……………だから、いらないうって言うてるのに。君も懲りないな……………」

うんざりとした僕に気付いているのかいないのか、エステルの声は続く。

「名付けて『ビックリ人面蛾』！ 羽のモヨウが人の顔に見える……………」

「……………」

見て見て！ と差し出し続ける彼女に根負けしてチラリと視線を向け……思わず顔を顰めた。

(うわっ……………何これ……………)

「あはは！ ビックリしたでしょー！」

エステルの手から逃れようと必死なそれが動いたたびに飛び散る鱗粉から僕は顔を逸らす。

「……………別に」

「うんうん、おねーさん頑張ったカイがあつたわよ、よし、次はもっとすごいヤツとってくるから！」

そう言つて未練もなく蛾を離れたエステルは、手についた鱗粉をパタパタと叩き落とすと踵を返して駆け出した。

「うっ、ひゃっほー！！」

おかしな声を辺りに響かせながら。

「本当に、騒がしい子だな……………」

束の間になるだろう静寂に身を委ね、僕は目を閉じた。

「……ヨ……ア……！」

「……帰ってきた……」

……しばらくして再び聞こえてきた呼び声に僕は肩を落とす。思わず零れた眩きには疲れの色がありありと浮かんでいた。

「ヨシユア……！」

「なっ……あれは……蜂!？」

叫ぶエステル背後に群がる虫の姿に嫌な汗が流れる。
……一体、彼女は何をしたのだろう。

「池に……」「えっ!？」

あっという間に駆け寄ってきたエステルは、啞然とする僕の袖を素早い動きで掴み、力強く大地を蹴った。

「飛び込め……!」「うわああ……!」

予想以上の強さで引つ張られ僕はたたらを踏む。そのまま一歩、二歩と進み三歩目は空を切った。体を襲う浮遊感……そして、バシヤン! という音と衝撃……気づけば僕は池に沈んでいた。

「ぶはあっ……!」「っは……っは……っ!」

しばらくして水面に顔を出したエステルは「あははは!」と声を上げて笑う。

「はあ、はあ……………」
「……………何をするんだ！」

体に張り付く服の不快感も合わせて怒鳴る僕に彼女はひたすら笑いを返す。そしてとことんお構いなしな彼女は両手一杯に水を掬った。……………その用途は言わずもがなである。

「ん……………？ あはははは！ それそれっ！ 水かけちゃうぞ！」
「……………クツ……………」

僕はバシャバシャと顔にかけられる水を手を翳^{かざ}して遮る。……………どれくらいそうしていたのか、水をかける事に満足したエステルは池に体を浮かせ、瞳を閉じる。

「はー、気持ちいい……………」

その濡れた髪から流れ落ちた雫が頬を伝い切ると同時に彼女は瞳と口を開いた。

「あ、そうだ。釣りしよつと。水遊びも好きだけど、やっぱり釣りのほうが面白いもんね。よーし、お昼ごはんを釣り上げてやるっ！」

そうして池の縁に移動した彼女は僕を振り返る。

「ほら、ヨシユアも上がる。着替えないと、カゼ引いちゃうぞー！」

差し出された手と、向けられた笑顔に僕は

「……………」

The First Week・「4」

濡れた服を替えた僕は先程まで座っていた時と同じ場所に腰を下ろしている。エステルの方は池の縁に座り、上機嫌な鼻様子で釣竿を揺らしていた。

ほどなくしてかけ声とともに釣り上げた魚を見た彼女は歓声をあげる。

「やった、大物だ！ これはヨシユアの分ね！」

「……僕の分は……いないよ」

「次はあたしの釣ろつと。釣れなかったらお昼ぬき！」

「よつと！」と再び釣竿を振った彼女の楽しげな姿に、視線を明後日の方向に逃して僕は溜め息を吐いた。

(まったく……本当に人の話を聞いてないな……)

「おっ、来た来た！ とりゃっつ!!」

相変わらずなかけ声と水を切る音。次に上がった不満に釣れた魚は小さかったのだろう。

「あ、カサギんだ。むう、小さい。これはおとーさんのだな……」

何時の間にか、エステルの一挙一動に耳をそばだてている自分に気付き、本日一番の深い溜め息を落とした。

「あのふりよーオヤジ、どーせ遊び歩いてるんだし、このくらい、とーぜんのはツよね！」

「え……………？」

だけど、それも続いたエステルという言葉に吹き飛ばす。思わず彼女に視線を向けるも、そんな僕に気付く様子もなく釣竿を振っている。

「次のヤツがあたしのよ。あたしのお昼ゴハン！ とっつ！」

(この子、カシウス・ブライトのことを知らないのか……………？
娘には何も話していない。彼らしいといえば彼らしいけど……………)

「ああっ、逃げられた！ くっそー！！ 次こそ！ 次こそ釣るぞ
！！ せいっ！！」

「……………」

コロコロと表情を変えるエステルは見ていて飽きない。小さな事で笑い、喜び、悔しがる。それは僕にはない感情の動きで。

「む、びくつときた！ いや、まだまだ……………ちょっとつつつただけ……………」

(……………やれやれ……………あれ……………？)

不意にエステルの周りが色付いたような……………。

「あの子……………」

「ん？ ……なに？」

陽の光を受けて輝く水面の照り返しすら増した気がして僕は顔を背ける。

「いや……………」

「ん…………？ ま、いつか」

そうして背けた先の景色すら眩しく感じて、僕は無意識に手を翳していた。

(緑が…………目に痛い…………世界は…………こんなに、明るかったのか…………？)

「あ、来た！！ 今度こそ大物だ！ よーし、お昼ごはんいただきっ！」

バシャンと音を立てて釣り上げた糸の先を見て、エステルは叫んだ。

「あれっ、ちっこい！？」

The Second Week . [1]

いつものようにエステルがどこかへ飛び出した昼下がり。束の間の静寂に身を委ねていると、どこからか話し声が聞こえてきた。

ブライト家では感じた事のないその気配に、全身に緊張が走る。僕はここ数日で定位置となった木に背を預けたまま、できるだけ気配を殺し、近付いてくる声の主を見定めるために目を凝らす。

「どーしちゃったのかなあ……」

「昨日もお店に来なかったし……」

「ま、気まぐれなエステルのことだし。そんなに心配しなくてもいいんじゃない？」

「でも、今までは毎日遊びに来てたのに……」

少しして、エステルと同じ年頃の少女が二人、ブライト家の敷地に入ってくるのが見えた。

その内の一人は、短い髪を肩口で跳ねさせ、どことなく勝ち気な表情をしている少女で、その身を包むのは若草色のワンピース。下に履かれたズボンが彼女の活発さを表しているように見える。

もう一人の少女は、肩ほどまである髪を淡い色のリボンで飾り、白のブラウスにピンクのワンピース。不安げに下がった眉と、のんびりとした話し方に大人しめな印象を受ける。

「エステル、いる？ エステルってばー！」

無人の家に向かってエステルの名を呼ぶ少女たち。僕の存在に気付いている様子は……ない……？

彼女たちが連中の差し金なら、これが演技である可能性も否定できない、が……。

「も、もしかして悪いヒトにゆうかいされちゃったとか〜!?!」

「……それなら、魔獣に襲われて瀕死の重傷を負い哀れ森のなかでのたれ死んだ……の方が微妙に可能性が高いわね」

「えええ〜っ!?!」

「あの子、普段からアブナイとこ行ってるみたいだし」

澄ました耳に聞こえてくる話は、エステル的事ばかり。それも彼女をよく知っていないければ出てこないような行動パターンを的確に突いている。

僕としても、その予想は強^{あなが}ち間違っではないと思う。

「エ、エステルう……」

「冗談だつてば」

大人しめの少女が、勝ち気な少女の予想を真に受けて瞳を潤ませ始めたのを見て、僕は迷い出していた。

遠目で見える限り、彼女たちが演技をしているようには思えない。これが僕を油断させるためだけに行われているのであれば、連中は相当慎重になっているのだろう。だが、それだけの価値が自分にあるとは思えない。あるとすれば、カシウス・ブライトの存在……。

「エステル〜? いい加減でてこーい! エリツサが泣いちゃうぞ〜!」

「……エステルなら出かけてるよ」

彼女たちが追っ手かどうかを見極めるためにも、ある程度の接触が必要だと判断し、僕は二人の少女に向かって声をかけた。

その声で僕に気付いた彼女たちは、ほぼ同時に驚きの声と表情を浮かべ、こちら近付いてくる。

「んん……………っ!？」

「あれっ……………?」

……普段ならば、絶対に執らない危険な行為　それを許してしまった理由は、僕の中の天秤が彼女たちと連中の関係を否定する方向へ傾いていたからかもしれない。

僕は無言で、近付いてくる二人の一挙手一投足に気を配る。

「……………」

彼女たちは、僕が寄りかかっている木の数歩手前で歩みを止め、まじまじとこちらに視線を投げてくる。それから、何かを考え込むように沈黙した後、二人揃って素っ頓狂な声を上げた。

「……………誰っ!？」

「……………だれっ!？」

The Second Week・「2 1」

「ヨシユア〜！ すっごい虫、つかまえたぞ〜！？」

砂利や草を蹴散らす音よりも大きな声を上げながら駆け寄ってきたエステルが、その声に振り返った二人の姿を見てピタリと止む。

「……あれ、エリツサにテイオ？ 来てたんだー」

僕の傍に立つ二人を瞳を瞬かせて見つめた後、エステルは首を傾げながら破顔した。

そんなエステルの様子に、エリツサと呼ばれた大人しめな少女が頬を膨らませ、テイオと呼ばれたもう一人の少女は不満気に眉を寄せ唇を尖らす。

「あ、エステル……もー、今まで何してたのよ。心配してたんだから〜！」

「ねえエステル、この子知り合い？ さっきから何を聞いても返事してくれないんだ。答える義理は無い」だって」

勝気な瞳が睨むような鋭さを伴い、僕を捉えるがすぐにエステルの方へ向けられる。

あれから……彼女たちが素っ頓狂な声を上げた後から、色々な事を聞かれ、一方的に色々話を聞かされた。そこから得られた情報が全て本当だとすれば、必要以上に関わる事が得策とは言えないだろう。

「……………エステル。この二人は君の友人か？」

「え、うん。そうだけど……………？」

不機嫌に寄越される視線を無視して僕はエステルに問いかけると、彼女は不思議そうにしながらも頷いた。そこに嘘を吐いている様子も、何かを隠している様子もない。

(本人たちの話とも一致するな。……………隙だらけだし、訓練を受けている様子もない。そろそろ連中が嗅ぎ付ける頃かと思ったけど……………この二人は違うみたいだな……………)

得られた確信に安堵した所為か、知らず強張らせていた体の力が抜けるのがわかる。それが中途半端に力の入った体勢を崩す切っ掛けとなり、僕は木の幹に全ての体重を預け、ほっと息吐いて目を閉じる。そうすれば、背に感じる幹の感触がより濃くなった気がした。

「さつきからこの調子なんだよ。ロレントじゃ見な顔だし……………」

エステル、この子のこと知ってたんだよね」

「ああ、うん。ヨシユアはね、実は……………」

そうして沈黙を続ける僕に埒が明かないと、勝気な少女は苛立った溜め息と共にエステルに答えを求め、その問いかけに彼女は待ってました、とばかりに声高らかに宣言する。

「あたしの弟なんだ!!」

(な……………ッ……………!?)

エステルの答えに、僕は驚きの声を胸中で上げ、彼女の顔をじつと見つめてしまう。

……不可解、その一言に尽きた。今ままで決して友好とは言えないやり取りをしてきたにも関わらず、弟だのなんだの、自分と近い存在だと主張する彼女の行動が理解できない。しかも、とても嬉しそうに。

なぜだか、そんなエステルの様子が酷く気に障っていた。

「えっ、エステルの弟？　そ、そうだったんだー。はあー、ビックリしたー……」

「おいエステル。それ説明になってないぞー。イキナリ弟って……それだけじゃわかんないよ」

「ほんとだもんねー。ね、ヨシユア！」

苛立つ僕を置き去りにして、それぞれ違う反応を示した二人に、エステルは笑顔を向けたまま、弟である事を求めてくる。

「……そんな訳ないだろ」

そうした彼女の態度に、僕はとても不快になって、痛む足を引きずって歩き出した。

The Second Week・「2 2」

「あ、ヨシユア！ 待ちなさい！」

かけられた静止の声も無視して、エステルまの横を通り過ぎる。
そんな僕の背を少し怒った雰囲気まを纏うエステルの声が叩いた。

「むづう……………おねーさんのゆーこと聞きなさい！」

大好きよ、ヨシユア

一瞬だけ脳裏を過った姿に、歩みが止まる。

……………何も知らないくせに、簡単に内側に入ってこようとすするエステル。
それが堪らなく気に障る。

「……………君みたいなのが姉さんなわけないだろ」

「え……………？」

だからか、吐き捨てるようにして零した声は低く、嫌悪に満ちていた。彼女はきつと、こんな感情など向けられた事はないに違いない。上がった困惑の声が、それを証明しているようで、苛立ちは更に募る。

「君たちと馴れ合うつもりはない。僕がここに居るのは……………カシウス・ブライトも言っていただろ。……………」成り行き”だよ”

「……………」

ささくれ立った気持ちの所為で饒舌となった舌から次々と溢れてくる棘を含む言葉たち。何時の間にか静まり返ったそこに響くのは、僕の声だけとなっていた。

エステルからの声は ない。

「それと……虫を持ってくるのもう止めてくれないか。何のつもりか知らないけど、お節介も過ぎると怪我をするよ」

「……………」

全てを拒絶するよに背を向けたまま言い捨てた僕は、止めていた足を再び動かした。少しでも早く彼女から遠ざかるために。

だが、それが叶う事はない。そんな僕を許すほど、エステルは甘くなかったのだ。

「……………ジャ〜ンプ、キツ〜ク!!! とおっ!!!」

「……………うぁ……………っ!!!」

そんな叫び声とともに背中に入った衝撃に、僕は地面に倒れこんだ。そのまま僕の背に飛び乗ったエステルはグイグイと服の襟を引っ張り始めた。

「ええい、このこのっ!!!」

「イ、イタ……………ッ!!!」

そう言ってエステルは容赦なく襟を締め上げ、拳を叩き込んでくる。

……………この子は僕が怪我人と言う事を覚えているだろうか。

咄嗟に襟と首の間に手を差し入れ、完全に締まるのを防いでいる

が、そうでなければ窒息で倒れている。

「この家じゃ、あたしのほうが先輩だもん！ あたしがおねーさんだもんね！」

「い、痛い……」

僕の背中に乗ったまま、エステルは駄々を捏ねるように言い募り、暴れる。その無茶苦茶に振り回される足や手を何とか避けてはいるものの、考えなしの行動を読むのは難しい。避け切れなかつたいくつかは、遠慮なく僕の体に叩き込まれた。

正直、痛いし、重い。

「どーだ、おねーさんでしょ？」

あ・た・し・が・お・ね・え・さ・ん

ホラ、言ってみなっ！」

「……イヤだ」

少しだけ弛んだ襟元に、コンコンと咳き込みながらも、「こんな乱暴な姉はごめんだ」とばかりに拒絶を示せば、エステルの眉がきゅっと釣り上がる。

「なんだと〜!!」

すぐ耳元で上げられた声の大きさに顔を顰めつつ、エステルの意識が拘束から離れ弛んでいる隙に、体を返してそこから抜け出した。それにハツとした彼女がこちらに伸ばしてくる手を避けながら立ち

上がれば、僕を尋ねたままの位置で二人の少女が微笑んでいる。

「仲いいんだね……」

「うーん、そうみたいだな……」

「……その二人、ウルサイよ」

耳に入った看過できない発言に、振り返って二人を睨めば、「スキありっ！」と再び背中を踏まれ地面に転がされた。呻く僕を他所に、彼女は笑う。

そして、こう続けた。

「ヨシユア、今日からあたしがおねーさんよ。もうけってーじこつだから」

The Second Week . [3]

「……まったく、毎晩毎晩……本当にお節介だな……」

椅子の上で舟を漕ぐエステルの姿に、思わず溜め息が零れる。僕はベッドからそっと抜け出すと、エステルを起こさないように椅子から抱き上げる。全く目を覚ます気配のない様子に杞憂だと思いつつ、それでも慎重にベッドへ移す。乱れた髪を顔から払い、上掛けを引っ張り上げる。

安心しきつた寝顔に苦いものが込み上げそうになり、僕はそれから慌てて視線を逸らし、足早に部屋を出た。

「……ヨシユア……また外で寝るのか？」

「……………」

気配を殺して外に出ていたはずなのに、彼 カシウス・ブライトにはお見通しだったようだ。かけられた声に震わせた肩を気どられぬよう視線を向ければ、テラスの椅子に腰をかけた後ろ姿があった。

「やはり、エステルと同じ部屋はイヤか」

イヤ、か……と、僕はかけられた言葉を頭の中で咀嚼してみる。

エステルと僕の関係、距離感………煩わしいとも鬱陶しいとも感じる時があるし、苛立たしく思う時もある。だけど………不思議とそれを“イヤ”だとは思わなかった。………多分、好きか嫌いかで言

えば、嫌いではない、と思う。だからといって好きなのかと言えば、それは違う気がした。

この感じを言葉にするなら……そう、“落ち着かない”だ。
……なぜか問いの答えを返す気になれず、無言のまま、月に照らされたグラスを口に運んでいる彼に近付いた。

「……あの子はお節介すぎる。しかも何も分かっていない。自分がどれだけ危険なことをしているかということも……」

それでも、開いた口から零れるのはエステルの事で……。

なぜ、どうして、彼女の事がこんなに気になるのか。放っておけばいい、僕には関係ない、そう思うのに、エステルが自分の事情に巻き込まれ怪我を負うのは“イヤ”だと思うのだ。

……だから、取り返しがつかなくなる前に、彼女を自分から引き離さしたい。でも、僕の言う事なんて、お節介な彼女は聞かないから……

「カシウス・ブライト。あなたが教えるべきでしょう……どうして何も言わないんだ！」

「……エステルの隣の部屋な、今は物置になってるんだが……片付けてお前が使ってもいいぞ。確かベッドもあつたはずだ」

更に一步、彼へ近づき、強く言い募るが、穏やかな言葉を返されるだけだった。僕は振り向きもしない彼の背中から視線を逸らすように目蓋を落とす。

「……遠慮しておきます。僕には、必要ない」

踵かかとを返す動作とともに声を吐き出した。そのまま歩き出そうとす

れば、「フム……………」と短く、けれど深く息を吐いたカシウス・ブライトは傾けていたグラスをテーブルに戻す。

「確かにエステルはやつは何でも首を突っ込むからな。お前の目から見れば、単純で何も分かっていない、ただの子供でしかないだろう。」

「だがな、ヨシユア……………」

テーブルに置かれたグラスの中の氷がパキツと小さな音を奏でる。

「……………何も分かっていないのはむしろお前の方じゃないのか？」

「……………っ！！」

喉が干上がったかのように声が出なかった。咄嗟の反論すらできないほど、僕は彼の言葉に打ちのめされていた。

彼の……………言う通りだった。治りきつてはいないとは言え、もう動ける体だ。それなのに、僕はここに留まっている。

……………そう、僕はその理由すら、分かっていなかった。

「少なくともあの子は自分が何を欲し、何をすべきかあの子なりに分かっている。それはあの子があの子であるために必要なことなんだろう。」

……………まあ父親としてはもう少しだけ女の子らしく育てて欲しいとは思っが……………」

「…………………………」

今、自分に何が必要で……………これからどう生きていくか、そのために何をしなければならぬのか……………全く、分からないまま……………ただ、

追っ手から逃げ続ければいいと。けれど……そもそも、なぜ、追っ手から逃げればいいと思っていたのだろう……？

……あの日、任務に失敗して、逃げ出して、生きる事を投げ出したら、救い出された。

そして、また、僕は逃げ出そうとしている。

それはなぜ？ ……分からない……答えが、見付からない。

「それでもヨシユア……」

欲することも、すべきことも見失っているお前と……

果たして、どちらが正しい？」

「……僕は……」

こうして、カシウス・ブライトの後ろ姿をただ黙って見つめる以外、何もできない僕は、彼女よりずっと矮小な存在だった。

今更、そんな事に気付かされる。

「……言っておくが俺はお前を甘やかすつもりはない。去れども、ここに居るとも言わん。

お前がこれからどこに行き、どうしたいのか……そして何者で在りたいのかはお前自身が決めるんだ。

それはまだ……誰も知らないことだからな」

……果して、僕自身がその答えを持っているのか、それともこれから見付けなくてはならないのか。

「……」

再びグラスを呷る彼の姿から、その答えを得る事はできない。

「……僕、は……」

自然と零れた呟きは、夜闇に紛れて消えた。まるで、何者で在る事もできない僕の存在を暗示しているかのように。

(僕は……一体……?)

Several Weeks Later. [1]

そうして平和な数週間が過ぎた……

僕の傷も癒え、歩けるほどに回復した。

エステルは飛び上がって喜び、西へ東へと僕を連れまわして遊んだ。

しかし動けるようになったということは、答えを出さなければならぬということだ。

選択の 때가、迫っていた……

そして 今日もまた、エステルに引っ張られるようにして僕は街道を歩いている。

一体、今日はどこに連れていかれるのだろうか、と小さく息を吐けば、二つに結わかれた彼女の髪が楽し気に跳ねる様子が視界の端に映り込む。そのうち歌でも歌い始めそうなエステルの調子についていけるわけもなく、僕は無言でその後姿を追った。

……しばらく歩くと、街道の脇に立つ簡素な案内札が見えた。そこに書かれている文字が読めるまで近付けば、街道から逸れるようにして小道が伸びている事に気付く。その十分に踏み均された道は、定期的な人の行き来がある事を示していた。

「パーゼル……………あの髪の毛の短い子が」

立て札に書いてある文字を読み取った僕が初めに思い起こしたのは、勝ち気な雰囲気を持つ少女と、それに付随する最近の出来事。途端、体を襲う脱力感。あまりいいとは言えない予感に溜め息混じりの呟きを漏らせば、それを耳聴く拾ったエステルがくるりと体を反転させる。

「うん、この農家、ティオの家なんだ。ティオんちね、この前…
…双子の赤ちゃんが生まれたんだって！」

そして、とても嬉しげな声をあげた。奇しくもその姿は、思い起こしていた姿とピタリと重なり、僕は軽く目眩を覚える。

「……………知ってるよ。君が大騒ぎしてたじゃないか。もう何度も見に行ってただろ。まだ珍しいの？」

そう、少し呆れたように言葉を返せば、「ううん、違ってた」と首を振られた。一体何が違うのか、訝しげに眉を寄せれば、胸を張ったエステルがその答えをくれるが

「今日は一日、農園のお手伝いよ！」

「は？」

……………予想の上に行くコタエに、僕は不覚にも間の抜けた声を上げてしまった。

「今は丁度シユーカーク期なんだって。でもハンナおばさんは動けないから、いつもよりタイヘンでしょ？ エリッサと話して、手伝おうってことになったんだー」

あれだけ毎日、僕を連れ回しておいて、いつの間にそんな話をしていたのだろう……。

エステルの行動力には、目を見張るものがある……とは言え、毎回毎回、それに付き合わされる身としては複雑な心境なのだ。

「……中々殊勝な心がけだとは思っけど……」

そう 今日だって僕を巻き込まないでくれれば、手放して褒め称えたと言っのに……。エステルから視線を逸らせば、口から自然と不平が零れ落ちる。

「だからって、何で僕まで……」

そんな小さな呟きをも聞き付けたエステルは、「問答無用」とばかりに僕の腕を掴む。そうして意気揚々と立て札の脇に伸びる小道へと足を向けた。

「つべこべ言わないの！ ほらっ、行くわよ！ これも“リバビリ”よ、“リバビリ”！」

……現実となつたいいとは言えない予感に肩を落として、強引な背中に向けて僕は息を吐いた。

「それを言っなら“リバビリ”……」

Several Weeks Later. [2 1]

そうして半ば引きずられるようにして踏み込んだ敷地には、エステルがエリツサ、ティオと呼ぶ二人の少女と、この農園の主である壮年の男性が一人、農園の中ほどに立っていた。

三人の姿を視界に入れたまま、サクサクと土を踏み鳴らして進めば、農園の入り口近くにいた少女たち エリツサとティオが振り返り声を上げる。

「あ、エステル。それにヨシユア君も？」

「ありやりや、強引に連れてきたっばいなあ」

……僕も来るとは思わなかったのだろう。僕を見たエリツサは少し驚いたように言い、ティオはやや呆れたように零した。

それがエステルに対しての呟きである事は言うまでもないが……
当の本人はそれに気付いた様子もなく「やっほー！」と言って、二人の手前で立ち止まる。その動きに合わせてヒョコヒョコと跳ねる栗色の毛先を眺めながら、半ば習癖と化している溜め息を吐いた。

「ティオ、おじさん、手伝いに来ました！」

そうして僕が息を吐いてる間にもエステルは声を上げ、それに男性は「おお、来たかい」と相好を崩す。

「いや、悪いね、ハンナの出産中にもいろいろと手伝ってもらったの……」

それから、申し訳なさそうにまなじり眦を下げた男性に、大した事ではな

いと、エステルは胸を叩く。

「あのくらい、お安いゴヨウよ。このエステル様にかかれればちよちよいのちよい！」

「はは、それは頼もしいなあ」

ニコニコと笑うエステルにつられるように、男性も目を細めて笑い……その視線が後ろにいた僕に移る。そこで初めて僕に気が付いたように、細めていた瞳で何度か瞬きした後、「おや、そちらの君は……」と首を傾げた。

「ああ、エステルの弟だよ。ホラ、前に話しただろ。ヨシユア君っていうんだ」

その問いに逸早く反応したのはティオで、男性に僕を紹介する。

“弟”、と言う単語に若干顔を引き攣らせながら、思わず出かかった訂正の言葉を飲み込んだ。……自らエステルの地雷を踏む必要はない……と、そんな事を僕が考えている間に彼もティオの言葉を思い出したのだろう。「おお、そういえばそんな話も聞いたな……」と呟きながら、ティオに向けていた視線をこちらに戻し

「確かエステル君と大喧嘩したとか……」

「……………」

続けられた言葉に、僕は無言で目を閉じ　ガチャリ、と聞こえた音にそれを中断した。閉じかけていた目蓋を押し上げれば、僕たちの方を向いていた三人も音のした方へ振り返っている。

計、十の瞳が見つめる先には、『きゃっ、きゃっ』と声を上げる

赤子を二人抱きかかえ、こちらに歩いてくる女性が一人。

見つめられる中、堂々とした足取りで畑の間を縫った女性は、僕たちを見て驚きを含んだ声で嬉しそうに言う。

「あらあら、随分集まってるわね」

「あ、ハンナおばさん！」

「こんにちわ」

男性の隣で歩みを止め、柔らかな笑顔を見せた女性にエステルとエリッサがそれぞれ声を上げた。

それに対してハンナと呼ばれた女性は、エステルとエリッサに「はい、こんにちわ」と返すと、先ほどの男性と同じく申し訳なさそうに臍を下げる。

「二人とも今日はごめんよ。また手伝わせちゃって。あたしも早く農作業に戻りたいんだけどね」

ふう、と息を吐いた女性に、男性は「お、おいおい」と慌てた声を出し、言い聞かせるように「まだ作業は無理だよ」と続けるが、女性は心配いらなとばかりに首を振った。

「なーに、テイオの時は、もうすっかり働いてたんだよ。こうやって赤ん坊のアンタを背中に担いでさあ……」

そう言うつと女性は腕に二人抱えたまま器用に赤子を背負う真似をして見せる。

そんな女性の傍らで瞳を見開き「そ、そうだったの？」と振り返るエリッサに、テイオは苦笑いを浮かべながら「知らない、覚えて

無いって」「返っていた。

Several Weeks Later. [2 2]

「でも、さすがに双子だとそうもいかないね……」

腕の中に視線を落とした女性は、誰に言うでもない呟きを漏らしつつもその体を揺すって赤子をあやす。その姿を見るときもなしに眺めていれば、ふと、顔をあげた女性の目と僕の目が合い、それを何度か開閉させた後、「おや、そっちの黒髪の子は……」と首を傾げた。

その問いかけに逸早く反応したのはティオではなく、男性の方で

「ああ、ヨシユア君だよ。ほら、前にティオが話してたろ」

「ああ、エステルのオトウト君ね。まあまあ、また随分とかわいい子じゃないか」

「……………」

と、目の前で繰り広げられるどこかで見た光景に、何も言うまいと変わらず無言を通す僕にも、女性はエステルたちにしたように視線を下げた。

「あんたも手伝いに来てくれたのかい？ 済まないねえ……」

そうして申し訳なさそうに向けられた眼差しに居た堪れなさを感じて僕は視線を逸らす、それで女性からの視線がなくなるわけもなく。

……居心地の悪さに身じろぎすれば、服の下や髪に隠れた額ひたいに施

されたそれらをほんの少し覗かせてしまう。別段、それらを隠していたわけでもないが、それを見た女性が「おや、よく見たらまだ包帯をしてるじゃないか」と眉を顰めた時、そうしなかった事を少しだけ後悔した。

それに怪我の子細までは聞いていなかったのか、女性の指摘に男性も驚いた様子で僕をまじまじと見つめ直し「おお、本当だ」と口に開く。

「これは気付かなかったな」

それから少し気まずそうに男性は頭を掻き、女性は心配そうに眉を寄せている。そんな彼らが向けてくる労わり視線に、すぐにでもこの場を立ち去りたい気持ち湧き上がる。

けれど……それができるのならば、そもそも僕はここにいない。

何より、自分がどうしたいかも、どうするべきかも、未だわからないままなのだから。

「……傷はほぼ完治しています。作業に支障はありません」

答えは出ぬままに、言葉にできたのはたわいない事実。

なのに　優しい瞳を向ける事を、二人はやめない。

「いやいや、無理は良くないよ。どこか休めるところで……」

それどころか僕を休ませようと男性は辺りを見回し、女性は考え込む様子を見せ「そうだ」と声を弾ませた。

その声に引き寄せられるように、十の瞳が再び女性に集まったところで、彼女はニコリと微笑む。

「いいことを思いついたよ」

そして、満面の笑顔で告げられた“いいこと”に悪い予感しか抱いだけず、僕はそつと溜め息を吐いた。

「それでは収穫の手順を説明するよ。エステル君、エリツサ君、それにテイオの三人はこの辺りの畑の収穫を頼む。分担した方が効率がいいよ。北側の畑から取り掛かって欲しい」

「温室の野菜は、あたしとフランチで収穫しちまうからね……で、ヨシユア君には……その子たちを頼むよ」

そうして女性から手渡された二つの重みに、なぜだか酷くやるせない思いに駆られ戸惑うが、彼女がそれに気付く様子はない。ただ、僕の腕の中に渡った赤子を慈しむように撫で、「……男の子の方がウイルで、女の子の方がチエルさ」と笑う。

……確かに、作業に慣れている女性の手が空いた方が効率は良い。何より、支障はないとは言え、怪我の跡が残る僕を働かすのは、彼らの良心が許さないのだろう。

だから、このような役回りになるのは必然的とも言える、が……

「……………了解、しました」

それでも重すぎる二つの温もりに、返す声がきこちなくなるのを隠せなかった。

「それでは作業を始めよう。途中でわからないことがあったら、いつでも聞きに来てくれよ」

フ란ツと呼ばれた男性の言葉を契機に、『はい！』と元気良く声を上げ三人は、それぞれの持ち場へ向かって駆け出していく。その姿を見送った後、腕の中にある二つの温もりに視線をやれば、『きゃっ、きゃっ』と返される無邪気な笑顔。そして、僕とは違う、真っ白な手。伸ばしたり、振り回したりしては楽しそうに声を上げている。

「……………」

………見ていただけで湧き上がってくる居た堪れなさに、僕は目蓋を落とす事で逃げ出した。

Several Weeks Later. [3 1]

赤子たちの白い柔肌に直接、陽が当たらぬよう近くの木陰に入った頃には、元気良く腕を振り回していたのが嘘のように安らかな寝息を立てていた。

座らぬ首が重く腕にのしかかり、四肢の力が完全に抜けている事から、それなりに深い眠りに就いているのだろう。

「今は落ち着いてるみたいだな……このまま大人しくしてくれるといいんだけど……」

小さな胸を上下させる様子を見やった後、そつと赤子を抱え直す。その衝撃に僅かに目蓋が震えたが、開かれる事はなく、僕は細く息を吐いた。

赤子たちから畑へ視線を映せば、緑の作物の隙間からちよこちよこと跳ねる栗色のツインテール。目を閉じれば、暖かい緑の匂いとエステルたちのはしゃぐ声。時折吹く風は赤子たちの生えきっていない前髪を柔らかに攪かきまつ。

とても穏やかな　それ以外に例えようのない緩やかさで時が流れていく。

(この数週間、追っ手の気配は無い……)

どんなに振り返ってみても、ブライト家に身を寄せてから一度もそれらしきものを感じていない。

(何故だ……僕の居場所くらい、とっくに突き止められていていいはず……)

それができない組織ではないはずだ。
だから、可能性としては

(もう僕には関心がないということか？ …… だから …… 記憶
だけ消して、捨てた ……？ いや、だけど ……)

断片的に残る記憶が、あの組織がそんな生易しいものではない事
を告げている。しかし、それを思い出そうとすると、途端に霞がか
つてしまう。

(何だ …… 何か大切なことを …… …… 大切なモノを失ってしまっ
た気がする ……)

それは決して忘れてはならない、とても大事な …… 大事な、何か。
後、少し …… そんな気がするのに、指先に引つ掛かる事すらない。

(何だ …… …… …… 僕は、一体 …… 何を ……)

「 …… ヨ …… ア …… !」

(…… 一体、何を ……)

「 …… ヨシユア!」

「 え …… …… 」

耳に強く響いた呼び声に弾かれたように顔を上げれば、ニツコリ
と微笑むエステルがいた。その目と鼻を突き合わせるような近さに
驚き、返事をできずにいれば、弾む声で「ね、ヨシユア!」と、も
う一度名を呼ばれる。

それから僕の反応を待つかのように、彼女は視線を合わせたまま落ち着かない様子で体をゆすっている。

「……………エステル……………」

それを呆けたまま見詰め、何度か瞬きをしてようやく声を返した僕に、嬉しそうに瞳を輝かせたエステルは、抱えていた袋の中に入れてあった右手を勢いよく取り出した。

「ほら、見てこのニンジン！」

袋から取り出されたオレンジ色のそれは、彼女の手に余るほどの大きく所々に土を付けている。取り分け、太陽の光を一心に浴びた緑の葉は瑞々しい。

「どーだ、すごいだろ。これあたしがとったんだぞ！ こっちのナスビだって……………つやつや！」

左手にニンジン掲げ持ったまま、右手で再び袋を掻き回したかと思えば、今度は光沢の美しいナスを取り出して自慢気に笑う。

彼女の両手に収まった野菜たちは傷一つない体を惜しげなく晒し、食べ頃を主張するかの如く鮮やかに輝いている。それに比べて体中のあちこちに擦り傷をこさえているエステル。中でも膝に作られている擦り傷は、見ている方も“痛そう”と顔を歪める程度には十分な出来栄えで。

「……………あのさ……………」

痛々しい膝に視線を投げて問いかけてみるも、彼女は左手でニンジン、右手でナスを僕に差し出したままの恰好で「ん？ なに？」

と首を傾げただけだった。

鈍いのか、図太いのか、感覚がないというわけでもないだろうが……聞いてみたい気もするが、要領を得ない答えが返ってくるだろう事は目に見えている。思うところは色々あるが、とりあえず「はあ………」と溜め息を零す事で一緒に吐き出した。

Several Weeks Later. [3 2]

「……エステル、膝をすりむいてるよ」

一応は怪我をしているという事を自覚させようと指摘してみるものの、やはりと言うべきか、彼女は怪我に気付いていなかったよう
で、「へっ………?」と目を丸くして自分の膝を覗き込む。
……どうやらエステルは一つの事に集中すると周りが見えなくなるらしい。その中に自分自身を含めるのはどうかと思うが。

「君はいつも、後先考えないで突っ走るから……」

僕は抱いていた赤子をそつと草の生えた柔らかな地面に寝かせ、腰のポーチからハンカチと消毒液を取り出した。その蓋を緩めながらエステルの前でしゃがみ込む。

「ほら、膝を見せて」

「う、うん……」

エステルは促されるまま両手の野菜を袋に戻し、膝にかかっていたズボンの裾を捲り上げる。そうして僕の目の前に晒された膝は、案の定、畑の土で黒く汚れていた。

そこで僕は手にしていたハンカチでエステルの膝から柔らかな土を叩き落としていく。粗方の汚れが落ちたところでハンカチを裏返し、汚れが付着した箇所を内側に織り込むように畳む。四分の一ほどになったハンカチを擦り剥けている場所の少し下に押し当て、反対の手で蓋の開いた消毒液を遠慮なく傷口に振りかけた。

「つつつ……！ し、しみる……」

消毒液が傷口を伝った瞬間、エステルエステルの口から小さな悲鳴が飛び出した。ぎゅつと閉じられた目蓋の縁に薄っすらと涙が光る。消毒液が与える痛み痛みに耐えている所為か、体は堅く強張っていた。

「このくらい、我慢しなよ」

（まったく、いつも生傷だらけだな。以前から気になってたけど、破傷風とかにならないのか？）

大小様々な傷跡を半ば呆れたように眺めている僕をエステルは「……？ ヨシユア？」と不思議そうに呼んでくる。

呼ばれるままに視線を向ければ、どうしたの？ というように首を傾げる姿が飛び込んできて、僕は「まったく……」と二度胸中で咳いた。

人の事は散々気にするくせに自分の事になるとからきしで。

「……本当に、世話が焼けるな……」

溜め息と一緒にそう零せば、「う……」と頬を膨らませてエステルはそっぽを向いた。

「……手当してなんて頼んでないもんね！」

そっぽを向いたままツンと唇を尖らす彼女に苦笑を漏らし、「だから世話が焼けるんだよ」と返す間も僕の手は休む事なく傷口に消毒液で湿らせたハンカチを滑らせていく。

「自分で処置するわけでもなし、自己申告するでもなし。いつ見て

も、危なっかしくてしょうがない……」

そうしてエステルに苦言を呈しているうちに膝の手当ては終わり、他にも処置の必要がある箇所がないかを確かめるため、サッと視線を走らせる。

小さな傷まで面倒を見ていたら切りがないと思いつつも、目に付いた傷の全てに処置を施していく。

「……？　ねえヨシユア……ヨシユアはどうして」

（あ、手の甲も切ってるな）

そんな中、剥き出しのままの手の甲に一筋走る赤い線を見咎めて、僕はエステルの手を引いて消毒液を振りかけた。その瞬間、エステルは「……ひゃう！」と裏返った声を上げ、僕に掴まれていた手を跳ね上げた。

「しよ、しよーどくする前に言いなさいよ！」

突然の刺激に余程驚いたのか、エステルは吊り上がった目で僕を睨んだまま、消毒液を被った手の甲にふーっ、ふーっと思を吹きかけている。

涙目の彼女に零れそうになる笑みを堪え、処置を続けた。幸い、手の甲以上の傷はなかったようで、他は軽くハンカチで拭う程度で済んだ。

「………はい、終わったよ。あまり怪我しないように、今後はもう少し」

『う……うえーん、うえーん！　ふえーん、ふえーん！』

無駄かもしれないと感じながら再三、怪我への忠告をしようと言
を開きかけた時、眠っていたはずの赤子たちが何の前触れもなく泣
き出した。顔を真つ赤にして力の限り声を上げる姿に圧倒されたの
か、エステルは一瞬硬直し 直ぐに慌て出した。

「ああっ、泣き出しちゃった！ ええっと……どうしよう！」

火が付いたように泣き続ける赤子たちを交互に見詰め、おろおろ
と右へ左へ行ったり来たりを繰り返す。

そんなエステルの狼狽えぶりに吹き出す前に、僕は赤子たちの前
に屈んだ。

Several Weeks Later. [3 3]

赤子たちのおしめなどを確認しながら、後ろで取り乱しつつも僕を手伝おうとしてくれているエステルに「……………いいよ」と制止の声をかけた。

「子守は僕の仕事だ。君は自分の仕事に戻りなよ」

「え、でも……………」

わたわたと動かしていた手をピタリと止めて戸惑うエステルを横目に、寝かせていた赤子を抱き上げる。そのまま一定のリズムで体を揺らすと、徐々に泣き声は小さくなり、やがて止んだ。

『ふえーん、ふえ……………あぶ……………』

「……………！ な、泣き止んだ！」

すやすやと寝息を立て始めるまでの過程をまじまじと見詰めていたエステルは、二つの瞳を零れ落ちそうなほど大きく開いている。そして何かを考え込むように僕と赤子たちを見比べたかと思えば「……………ヨシユアって、お母さん？」と、突拍子もない事を言い出した。キラキラと目を輝かせているエステルに「……………何言ってるんだか」と肩を竦め、作業に戻るよう再度促した。

「早く仕事に戻らないと、いつまで経っても終わらないよ」

そう言う僕に「う、うん……………」と小さく頷いたエステルは踵かかとを返すが、その足が前へ踏み出されるより早く振り返り

「ヨシユア、ありがとね！」

と、満面の笑顔を見せ、次の瞬間にはタツタツタツと軽快な音を立てて走り出していた。

……元氣よく駆け出したエステルは遠くなる背を見送りながら、湧き上がってきたむず痒さを覆い隠すように僕は瞳を閉じた。

「……ありがと、か……」

それからしばらく目蓋を閉ざしていたが、腕の中の赤子たちが身動きをした事で意識を引き戻される。無意識に止めていた体を揺らし直せば、くたりと四肢の力が抜けていった。

静かに上下する小さな胸を眺めながら、赤子たちをあやすうち不安定になった体勢を直そうと上半身を弾ませる。そうして何度目かの拍子にポンツと跳ねた腰のポーチから何か放物線を描いて草影に飛び込んだ。

……どうやら消毒液やハンカチを片付けている途中で泣き出した赤子たちに手間取られるうちにポーチの口を閉じ忘れていたらしい。すっかり大人しくなっていた赤子たちを再び地面に寝かせ、草影に落ちた何かに手を伸ばす。

ひんやりとした、それでいて酷く懐かしい触り心地。それだけで、拾い上げた何かの正体が僕には分かった。

付いていた土を落とし、その形を確かめるよう銀色の縁を指先でなぞる。

ずっと、身近にあったのに、随分と手にしていなかった事を思い出して、なぜだか少しだけ泣きたくなった。

(ハーモニカを吹くのは、どれくらい振りだろう……)

「うまく、吹けるかな」

どれぐらい吹いていなかったか、曖昧な記憶しか持たない僕にはわかりようもなかったが、それでも体はすっかり覚えていてくれたようで、自然と曲を奏でる事ができた。

吹き口に息を入れれば、聞き慣れた懐かしい音が次々に溢れ出してくる。

耳の中で音が踊る度、忘れかけていた何かを思い出せそうな気がして、ただひたすら記憶と共に音を重ねていく。

姉さんの事、優しい時間、幸せだった記憶。

(あれ……？ でも、何か忘れてる……姉さんの隣に誰か……)

パタン

どこかで遠い場所で、扉の開く音がした。

やあ、こんにちわ。

……そんなに警戒しなくてもいい。私は魔法使いだ。

君の心を治してあげよう。

ただし……

代償は支払ってもらおうよ？

(……………やっと分かった)

どうして、思い出せないのか。それは、とても簡単な事だった。なぜ、今まで気付かなかったのか不思議なほどに。

そう

(僕は支払ってしまっただ。大切なもの、幸せな時間……そして僕を形作る全てを……)

支払って、失って、作り直された僕は、何も持たず、そして何かを感じる事もない。

(僕は人形……壊れてしまった歪な欠片)

痛みすら感じられない空っぽな僕は、きっと……

(誰かの大切な物を壊すために、存在する)

思い出したくなかった……分かりたくなかった……気付きたくなかった……。それほどに、この陽だまりの中は優しく、穏やかで……壊れた僕が初めて知った温もりがあった。

だからこそ、唇を噛み締め思う。

(……………去らなければならない。この世界を、僕はきっと壊してしまっ)

僕が僕である限り、その時は必ず訪れる。

……守りたいと思ったのだ、誰よりも近いこの場所で。 それ

なのに、そんな簡単な事すら叶わない。

（大切な物ならば、手元においておかないことだ。どこかこの手の届かないところへ、遠ざけておかなければならない）

それがたとえ身を切るよりも辛く、苦しくても……唇から離れたハーモニカを軋ませるほど強く握りしめる。

（僕が………僕の闇が、この場を穢してしまう前に………去らなければならぬ）

やっと、見付けた答えの残酷さに僕は嗤った。

（僕の存在が、彼女を傷つけてしまう前に）

ヨシユアがハーモニカを風いている時、ティオとエリッサとエステル
の三人が会話をしているシーンですが、視点切り替えするのも微
妙な位置と量だったので省略しました。

以下省略した会話文です。

エリッサ：「はああ……………カツコイ……………」

ティオ：「あんな特技を持つているとは……………しかも夕日背負つて
るし。あれは反則だよね」。エステル、あの子がハーモニカが吹け
るって知ってた？」

エステル：「むむむ……………ヨシユアのヤツ、オトウトのクセにあ
たしに一言も言っていない……………なまいきだぞ！ ヨシユアのバカ！」
エリッサ：「エステルってば……………」

ティオ：「……………何怒ってんのよ……………」

……………眩き……………

最近、甥っ子が産まれてその世話に追われていました。

それで思ったのですが、十一歳の子供が新生児（二〜三キロ）と言
えど、二人も抱っこってできる？ と。

前まではそんな事、考え付きもしなかったので、経験はやはりもの
言うなと思った今日この頃。

ヨシユアは鍛えてるし精神も成熟してるからできるのだろう……………と
いう事にしてます。……………つあ、でも病み上がりだった！

次はいよいよ（？）エステル視点になります。

よろしければもう少しお付き合い下さい。

翌日「1 1」

翌日　あたしはティオとエリツサに会うためにロレント市内まで来ていた。

「……………ヨシユア……………『いぶし銀ジャンボカマキリ』や『タツノオトシゴ・ダブル』でも満足しないとは……………」

昨日までのヨシユアの反応を思い返し、少しだけ嬉しくなると同時に少しだけ悔しくなる。

「我が弟ながら、なかなか好みランクの高いヤツ……………！」

くるりと振り返ったあたしは、ヨシユアがいるであろう方向を見詰め、決意を新たに胸に刻む。

「ふふん、だが今日という今日は満足させてやる……………」

その時のヨシユアの顔を想像しながら、あたしは拳を空に向かって突き上げた。

「『伝説のアノ虫』でな！」

そうしてまだ見ぬ獲物へ闘志を燃やしているあたしの傍でガチャリと扉の開く音がしたかと思えば、「あら、エステルちゃんじゃない！」と、声を掛けられる。

その呼び声に再び振り返ると、不思議そうな面持ちをしたステラおばさんが傍までやってきていた。

「どづしたの、そんなところで仁王立ちしちゃって……今日も虫取り？」

首を傾げながら、あたしを上から下に眺めるステラおばさんに向かって「えっへん」と胸を張る。そうすれば、あたしの腰にある虫取り網もその存在を主張するように揺れていた。

「今日のあたしは一味違うのよ」

胸を張ったままのあたしに目をぱちくりとさせたステラおばさんは「あらあら、そうなの？」と言う。だからあたしは「うん、そー」と笑って偉大な計画を口にする。

「今日は特製のシロップを作って虫をおびき寄せせるの。そのシロップを使うと、すごい虫が集まるんだ」

以前、それを使った時は、よく取れる虫から見た事もないような虫まで集まってきたのだ。だからきつと、ヨシユアがビツクリする虫も取れるに違いない。

どれだけ沢山集まるのか、体全体を使って表現すれば、「まあ、それはすごいわね」とステラおばさんは感心したように頷きかけ「……………じゃなくて」と頭を振ってキツと目を吊り上げた。

「エステルちゃん？ あなたもう十一なんだから、もうちょっと女の子らしい格好をしないとダメよ？」

「だってー、この服でないと動きにくいんだもん！」

吊り上げた目をそのままに一步一步近付いてくるステラおばさんに嫌な予感を感じたあたしは、早口でそう捲し立てると「じゃあー

ねー！」と手を振って逃げ出すようにその場から離れた。

「あ、エステルちゃん!？」

背後で響くステラおばさんの呼び声を振り切るように、あたしは大路を駆ける。そして、少し先の十字路で足を止めたあたしはシロツプ作りの手順を確認する事にした。

「えっと、まずはシロツプの材料を集めないとね。『ドラゴンビーンズ』はエリツサに頼んで分けてもらって……『新鮮ミルク』と『とれたて卵』はティオにねだろつと！」

呟きとともに指折り手順を確認したあたしは、『ドラゴンビーンズ』をエリツサから分けてもらうべく十字路を左に踏み出した。そうして踏み出した足を包むスニーカーが少しだけ草くたひ臥れているのに気が付いて「うーん」と唸る。

「念のために……新作のスニーカーが入ってないか、チェックとこーつと！」

そうと決まれば善は急げとばかりにシロツプ作りを頭の隅に追いやったあたしは、百八十度体を返して新たな目的地を目指した。

翌日「1 2」

リノン総合商店

「リノンさーん！」

ガラんつと鳴る扉の釣鐘つりがねより大きな声で店の亭主の名を呼べば、
カウンター越しにリノンさんが苦笑いで迎えてくれた。

「やあ、エステル。またスニーカーを見にきたのかい？」

リノンさんの問いにその通りだと頷いて、あたしはカウンターに
食らいつく。商品ケースを蹴らないように気を付けながら期待に足
をばたつかせた。

「ねえねえ……！ 新しいの、入ってる？」

ごくりと唾を飲み込んであたしはリノンさんの答えを待つ。そろ
そろストレガーの新作が出る頃だったのも思い出して、あたしの頬
はだらしなく緩んだ。

今度はなんて言っただ強請ろうか、と考えるあたしにリノンさんが
すまなさそうな顔して「いやあ、残念ながら」と未入荷を告げてく
る。

……何度か瞬きをしてリノンさんの言葉を咀嚼そしゃくしたあたしはショ
ックに肩を落とした。

そんなあたしにリノンさんは再び苦笑いを零して、どこからか取
り出した紙束を「ええつと」と言いながらパラパラと捲めくる。

何をしているのかと首を傾げるあたしを置いて紙を捲めくっていたり

ノンさんは、いつの間にかその手を止めて、「次回の入荷は十六日かなあ……」と目を通していた紙の一枚所をトンッと指で示した。

「……………十六日!? あと一週間だ!!」

リノンさんの言う十六日がスニーカーの入荷日だと気付いたあたしは、今日の日付を思い出して飛び跳ねる。

「あと一週間、あと一週間……………」

そうやって忘れないように何度も指折り呟いていると、ガラッと釣鐘が鳴った。

聞こえてきた音に入り口を振り返れば、丁度扉を潜ったステラおばさんと目が合う。一瞬の沈黙の後、にっこりと笑ったステラおばさんは、「エステルちゃん?」と瞳を光らせてじりじりと詰め寄ってきた。……………けれどその目は全く笑ってなくて。

とりあえず「あ、ステラおばさんだ」と返しつつ、背筋に走る何かに促されるように一歩一歩後ろへ下がる。

「うふふ。ここで見つけたが百年目よ! 今丁度、エステルちゃんに良さそうな服を見てたところなのよ。今日こそ女の子らしいお洋服を着せてあげる!」

獲物を見付けた狩人のような目をしたステラおばさんは、どこに隠し持っていたのかフリルやレースの付いたブラウスやワンピースを取り出してあたしとの距離を一気に縮めてきた。

「えーっ、だ、だめ! これから虫取りするんだもん。汚しちゃう……………!」

伸ばされた腕を掻い潜り、陳列棚を挟みステラおばさんと対峙する。

あたしだって可愛い洋服に興味がないわけではない。だけど、今日のあたしは一味違うのだ。『伝説のアノ虫』を捕まえ、ヨシユアをビツクリさせると言う使命が

「はっ……………！？ そうだ、虫取りするんだった！ あぶないあぶない、忘れるトコだったし……………」

雷に打たれたように背筋を伸ばしたあたしの腰では虫取り網が不満げに揺れている。その様は早く早くとあたしを急かしているようにも見えた。それに独り頷いて、頭の隅に追いやっていたスロップ作りの手順を引っ張り出す。

「ええっと、まず材料を集めないかね！ よし、まずはエリッサだ！ ダツシユダツシユ……………」

そうしてステラおばさんの魔の手から逃れたあたしはエリッサの両親がやっているお店へ急いだ。

翌日「1 3」

「エリツサ〜!〜!」

居酒屋アーベントと書かれた看板の傍で、その姿を見付けたあたしは声を上げた。その呼び声であたしに気付いたエリツサは、持っていた掃除道具を片手にまとめて空いた手を振る。

「あ、エステル〜」

そうしてあたしが駆け寄るまでに掃除道具を花壇の脇に置いたエリツサは、熱っぽい溜め息を零して「えへへ……」と頬を緩ませた。

「昨日のヨシユア君、かつこよかったよね〜。またハーモニカ、吹いて欲しいな〜……」

両手を頬に当てて再び熱っぽい溜め息を吐いたエリツサに、あたしは頭の後ろで手を組んで「それがさ〜」と少し不満げに口を尖らした。

「……………ヨシユアったら、あの後から一言も口きかないのよね」

「えっ!?! ……そうなの?」

驚きを露にするエリツサに「う〜ん……………」とあたしは腕組みをして、昨日の行動を振り返ってみる。

農園の帰り道から既に口をきいてくれなかったけど、あたしの言葉に反応は返してくれた。だから、口もきけないくらい疲れてたのだろっつて。一応、ヨシユアは病み上がりだし。でも、あたしはま

だまだ元気だったし、何よりハーモニカの事を教えてくれなかったのが悔しくて……そして、今朝は目も合わせてくれない。そうすると、やっぱり

「あたしがハーモニカを取り上げて勝手に吹いたのがいけなかったのかなー……」

「もう。エステルってばー……」

あたしの告白に肩を竦めて呆れるエリツサ。それから真剣な顔で、少しだけ眉を寄せて「……あのね、エステル」と言う。

「ヨシユア君、なんにもお話してくれないけど……きつと何か、辛いことがあつたんだよ」

眉を寄せたまま「だからね……」と続けるエリツサにあたしは小さく、けれど、しっかりと頷いた。

「……うん、わかってる」

「え………?」

息をのんだエリツサを横目に、ヨシユアがよく浮かべる表情を思い出してあたしは声を沈ませる。

「ヨシユア、何か悩んでるんだよね。時々、すごく苦しそうな顔してるもん」

ヨシユアと初めて話した時から気になっていた。意図的に逸らされる視線に、人を拒絶する言動。誰かの笑顔に触れる度、寄せられ

る眉。

「……でも、たぶんあたしじゃ力になれないから」

ヨシユアが何を思い、何に躓つまずいているのか、あたしにはわからない。そしてそれは多分、ヨシユア自身が解決しなければいけない事なのだろう。

「だから………」

分かち合う事すらできない自分の無力さが苦しくて………だからこそ、あたしはあたしのできる事をヨシユアにしてあげたい。それはもしかしたら無駄な事かもしれない。余計な事かもしれない。だけど、そうだとしても、あたしは

「………今はただ、元気付けてあげたいんだ」

「エステル………」

今もきつと独りであるであろうヨシユアへ、ほんの少し思いを馳せた後、しんみりとした空気を吹き飛ばすようにあたしは笑う。

「……じゃあ『ドラゴンビーズ』ちょうだい」

エリツサに向けて両手を差し出せば、困惑した声で「え、あのコーヒーに使うやつ？」と聞いてくるので、あたしは首を縦に振ってそれに応えた。

「いきなり何〜？ あんなの何に使うのよ〜！」

ますます困惑を深めた顔のエリツサに、あたしは人差し指を唇に押当てて口角をニツと吊り上げる。そのままクスリと零して「……ないしょ」と答えれば、エリツサは浮かべていた困惑を僅かな呆れと、もの問いたげな表情で上書きした。

「エステルがそうやってねだる時って何か企んでるときよね」

あたしの顔をじーっと見詰め、少しだけ悩む素振りをしたエリツサだが、結局「んー、まあいいや。ちよつとまってる」と言い残し店の中に入ってしまった。

「はい、『ドラゴンビーンズ』」

それから少しして戻ってきたエリツサの手から受け取った『ドラゴンビーンズ』を、あたしはポーチへ放り込む。

こうして目的へ向かって一歩前進した事にあたしは嬉しくなる。

「よし、次はティオの番だ！ 『新鮮ミルク』と『とれたて卵』をもらってこなくちゃ！」

自然と弾んだ声で次の手順を確認すれば、エリツサがじと目で訊ねてくる。

「……ねえエステル、何を企んでるの〜？」

その問い掛けにあたしは「ウフフ………」と妖しく笑い、何をとは言わずに答えを返す。

「あとでエリッサにも見せてあげる！」

確か以前、『いぶし銀ジャンボカマキリ』を見せた時は目を回していたから、もしかしたら

「……………ビックリして気絶しちゃうかもしないけど」

そんなあたしの様子に何かを感じ取ったのか、エリッサの腰が僅かに引けている。

「……………じゃ、じゃあ遠慮しとく……………」

思わず、と言った風に声を零したエリッサに、ニヤリとした笑みを残してあたしは背を向けた。

「またあとでね〜！」

そうして未だ腰が引けているエリッサに手を振ったあたしは、テイオのいる農園に向かう為にミルヒ街道へ足を向けた。

翌日「14」

「ティオ〜!!!」

間もなくして辿り着いた農園で、畑の脇にしゃがんでいるティオの後ろ姿を見付けたあたしは、エリツサの時と同じように声を上げる。それから農園の入り口に流れる小川に架かけられている橋を渡り、首を傾げているティオの目の前であたしは足にブレーキをかけた。

「あれ、エステルじゃん。どーしたの？」

そう言つて不思議そうな顔を浮かべたのも一瞬で、あたしを上から下まで眺めたティオは何かに納得したように「……………つてその格好は虫取りに決まつてるか」と呟いた。

そんなティオに向かってあたしはステラおばさんにしたように「ふふん」と笑つて胸を張る。

「今日はちよつとトクベツなんだ」

何たつて今日のあたしは『伝説のアノ虫』でヨシユアをビツクリさせると言う使命がある。その為には特性シロップが欠かせない。だからあたしはエリツサにしたようにティオにも両手を差し出した。

「ティオ、『新鮮ミルク』と『とれたて卵』、分けて〜!」

手を掲げたまま小首を傾げ上目遣いで見詰めれば、訝しげに眉を寄せるティオ。

「なによ、ヤブから棒に。まさか料理に目覚めたってワケじゃないんでしょ？」

どうやらあたしのお願いは少し唐突過ぎたようなので、ティオには事情を説明する事にした。ティオはよく畑の手伝いをしているし、虫の類たくいで驚いたりはしないだろう、とあたしは独り頷く。

「えっへん、実はねー……………」

かくかくしかじか、ヨシユアを元気づけるために『伝説のアノ虫』をつかまえるのだ、とあたしは偉大な計画の一端を口にした。

「で……………伝説の、虫……………」

そうしてあたしのお話を聞いたティオは、戦った様子で一歩後ろに下がる。

虫に慣れているはずのティオでも“何それ”と言うように目を剥く。だから、きつとヨシユアも満足するに違いない、とあたしはその時を思い浮かべて笑み崩れた。

「うん、ヨシユアをビックリさせてやるの」

「あ、相変わらず説明になってないわね」

メラメラと闘志を燃やすあたしに押されたように数歩後ろへ下がったティオは、呆れたような溜め息を小さく落とした。

「えーっと、推測するに……………その虫をおびき寄せる芳香剤を作りたいってわけね？」

合ってる？　と言うようにあたしを伺うティオに、“ほーこーざい”なんて難しい言葉を使うなあ……と思いつながら「うん、たぶんそー」と首を縦に振る。

コクコクと頷くあたしにティオは嫌そうな顔をして更に数歩、足を後ろに進めた。

「その芳香剤ができて、間違つて私にぶっかけないでよね……」

嫌そうな表情のまま念押ししてくるティオに「だいじょーぶだいじょーぶ」¹と自信をもって答えると、今度は疑わしげな眼差しを向けられる。

「ホ、ホントかなあ……」

そうして呟くように不安を漏らしながらもティオは鶏小屋に向かつていった。

「はい、」注文のものよ」

ティオの手から『新鮮ミルク』と『とれたて卵』を受け取ると、エリツサからもらった『ドラゴンビーンズ』が収まっているポーチの中へ詰め込んでいく。

そんなあたしの様子を眺めていたティオが徐おもに口を開いた。

「あのお、エステル。ついでだから言つとくけど……」

「……？」

首を傾げてあたしは続きを待てば、少し逡巡したように視線を彷徨わせたティオが意を決したように話し始めた。

「あの子が弟になるんなら、少しずつ話をしたほうがいいよ。あの子の過去も、あなたの過去も」

そこで一度言葉を切ったティオは、何かを考えるような間を空けて再びその唇を動かした。

「……あの家にはレナさんが住んでいたってこと、私は知つて欲しいな」

目を細め、いつかを懐かしんでいるティオにあたしは少しだけ考える。

あたしが、そんな必要がないと思ってるって事を、あたしの言葉で伝える為に。……この優しい友人の思いに応える為に。

「……うん、ちょっとずつね」

ティオから目を逸らさずにあたしは続けた。これまでの日々を思い出して、これからの日々を思い描いて、あたしは唇を開く。

「でも、そんなのわざわざ話さなくてもいいの。ずっといっしょにいたら、わかってくるものだと思うから」

そう、きっとわかってしまうだろう。ヨシユアが触れていくであろう全てのものに、沢山の思い出がつまっているのだから。……そして、あたしはヨシユアに一つ一つ教えていくだろう。

「だって、ヨシユアはもうだいじな家族だから……」

あたしの思いをぶつけるように吐き出しきれば、」………「
か」と安心したようにティオは吐息を零した。

「あんたのそういうトコ、私は好きだよ」

そう言うてはにかんだティオにあたしは「………うん」と頷いて「
ありがとね、ティオ！」と同じく笑みを返した。

「よし、材料は全部そろった………後はミストヴァルトで『伝説の
アノ虫』をつかまえるだけ！」

クルリと体を返したあたしの腰に差し込まれた虫取り網も、よう
やくの出番を悟ったのか頼もしげに揺れている。

「待ってる、ヨシユアっ！！ 絶対ビックリさせてやるからな！！」

そうして声高らかに宣言したあたしは、農園前に流れる小川を一
足飛びに跳び越えてミルヒ街道へ駆け出した。

再びロレントに戻ってきたあたしは、建て直されたばかりの時計台の前で足を止めた。

「……………ちょっとよってこうかな……………」

そう誰に言うでもなく呟いたあたしは、時計台の周りをぐるりと巡る。やがて見えてきた時計台の中へと続く階段前であたしは再び歩みを止めた。そのままてっぺんを臨むように見上げれば、ふわりと流れた風があたしの髪を揺らしていった。

「おや……………エステル君じゃないか。どうしたんじや？」

声のした方向へ顔を向ければ、市長さんがいつの間にか時計台の角に立っていた。その立ち姿に「あ、しちよーさん」と声を上げれば、市長さんはゆっくりとした足取りであたしの横に並んだ。

あたしの傍らに立った市長さんを横目に、もう一度、時計台のてっぺんを見上げる。すればあたしの視線を追った市長さんも時計台を仰いだ。

陽の光に目を細めるあたしの横で、同じように見上げていた市長さんは「……………ああ、時計台じゃね」と感慨深く息を漏らした。

「先月、修復が終わったんじやよ」

それから続けられた言葉に見上げる視線を外す事なく、あたしは小さく首を振る。

「うん、知ってる……………」

ロレントに来る度に、遠目に見ていたから。

「ロレントの職人たちが集まっただけ。知恵を合わせて取り組んだのじゃ。建材も、できる限り元のものを使うようにした。ほれ、前とあまり変わっておらんじゃろ？」

市長さんの話に「……うん……」と相槌打って、壊れる前の時計台を思い出してみる。うっすらと記憶に残る時計台はロレントで一番、空に近くて、だけど……その姿をあたしは。

「あんまり……おぼえてないけど……」

あの日も、あたしは今みたいに空を見上げていた。そうしたらもつと空へ近付きたくなって時計台へ向かったんだ。

……空に黒い影が走ったのは、時計台に登った時だった。近くで、遠くで、大きな音して、あたしの目の前は真っ暗になった。まだ、そんな時間じゃないのに、鐘の音まで聞こえて……何が、起こったのか、わからなかった。ただ、ただ、怖かった。恐ろしくて、体の震えが止まらなかった。

あたしは知らず、ぎゅっと手を握り締め、手の平に刺さった爪の痛みを我に返る。はっとなつて隣を見れば、市長さんも何かを思い出すように目を閉じていた。

「……………」

それからしばらく黙っていた市長さんは、ゆっくり目蓋を上げるのと同じように口を開く。

「わしはこの時計台を見る度に、元気がでるんじゃよ。ロレントの

みんなが……いや、わしが今まで出会ってきた全ての人たちが、この街を応援してくれておる感じがいしてな……」

そしてまた話し始めた市長さんの声を聞きながら、あたしの記憶は再びあの日へ還えった。

あの後、ずっと耳元で鳴っていた『キーン』って音が消えた時、すぐ近くから唄が聞こえてきた。それは、何度もせがんで聞いたあたしの大好きな子守歌だった。

大丈夫よ、エステル

唄う合間に何度もそう言っつて、泣きじゃくるあたしをずっと、真っ暗だったところに光が戻るまでずっと、抱き締めてくれた。

だけど

沢山の人が泣いた。あたしも泣いた。でも、みんなあたしを抱き締めて、泣きながら言った。

エステルが無事でよかった

その時、あたしは強くなると決めた。あたしを守ってくれたお母さんみたいに、誰かを守るように。

「……………うん」

「だからわしは……………この場所を、大切に思っくんじゃよ」

……………この時計台には、お母さんがいる。あたしを守ってくれた優しくして強い人が……。だから、あまり近付かないようにしていた。

ここに来ると、無意識に頼ってしまいそうで、強くなれない気がしたから……。

だけど、今日は……。エリッサに告げた事は嘘じゃない。でも、本当はすごく不安だった。あたしじゃヨシユアを元気付けてあげられないんじゃないかって。

だから

大丈夫よ、エステル

「……………うん」

祈るように見上げた時計台から、声が聞こえてきた気がして、あたしは勇気付けられる。声に対して小さく頷いたあたしは、虫取り網を握る手に力を込めた。

それから自分を奮い立たせるように「……………よし……………！」と大きく声を出し、時計台に背を向ける。

「待ってる、ヨシユア！！ 今『伝説のアノ虫』をつかまえてきてやるからな！！」

そう言っただけで気合いを入れ直せば、肩に担いだ虫取り網も嬉しそうに揺れていた。これならきつと『伝説のアノ虫』をつかまえられるに違いない、とあたしは笑う。

「……………ほおっ！？ え、ええとエステル君や……………？」

背後で上がった、市長さんの声もなんのその。「ごーごー！！」と掛け声を上げながら、あたしはミストヴァルトの森を目指して時計台の下から走り出した。

翌日「1 5」(後書き)

以下エステルが去った後に行われているシーンですが、視点切り替えするの微妙な位置と量だったので省略しました。
以下省略した会話文です。

翌日「1 1」

ロレント入口からエステルが去った後。

ステラ：「はあ、相変わらずねえ……」

翌日「1 2」

リノン総合商店からエステルが去った後。

リノン：「最近、以前にも増して元気ですよね……」

ステラ：「何かいいことあったのかしら……」

翌日「1 3」

居酒屋アーベントからエステルが去った後。

エリツサ：「でも……ちよつと見てみたいかも」

翌日「1 4」

パーゼル農園からエステルが去った後。

ティオ：「お、おいおい……ミストヴァルトなんて、子供が勝手に入っちゃダメでしょうに。ってゆーか、その……伝説の虫って……何!？」

翌日「1 5」

時計台からエステルが去った後。

市長：「……はて……?」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0645t/>

旅立ちの朝

2012年1月9日06時47分発行